日本ロシア文学会

関東東北支部報 No. 41（2023 年 5 月）

〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33 千葉大学文学部法政経学部 1 号棟
人文科学研究院 大森雅子研究室気付
日本ロシア文学会関東東北支部事務局
E-mail: kanto.yaar@gmail.com

【ご挨拶】

来る 2023 年 6 月 3 日（土）13:00 より、昨年度と同様、ZOOM を用いたオンラインの形で、日本ロシア文学会関東東北支部研究発表会を開催いたします。4 本の修士論文成果報告と、3 本の博士論文成果報告がおこなわれます。その後、支部総会も開催する予定です（残念ですが、懇親会はありません）。参加ご希望の方は下記 URL のしめす申込フォームに必要事項をご記入のうえ送信してください（登録完了後、zoom 接続情報等を含む確認メールが届きます）：
https://zoom.us/meeting/register/tJEpdeGpqDMjHd1rdxvebPRtFyysf_qiiMYO

本報に発表要旨を収録しております。どうぞふるってご参加ください。

沼野恭子

【研究発表会プログラム】

13:00 開会：支部長挨拶

［修士論文成果報告］

13:05-13:35 **西角 美咲**（早大院） 司会：**伊東 一郎**（早大）
「巡礼における価値観の再認識と揺らぎ
——『ルーシの地の修道院長ダニイルの聖者伝および巡礼記』を題材として——」

13:40-14:10 **清水 真伍**（東大院） 司会：**番場 俊**（新潟大）
「ナスターシャ・フィリーポヴナの「美」の二重性
——「世界をひっくり返す美」のダイナミズム——」

14:15-14:45 **町田 航大**（早大院） 司会：**安岡 治子**（東大）
「『カラマーゾフの兄弟』における「キリストの発見」の意義
——旧約聖書ヨブ記との構造的相関に着目して——」

14:50-15:20 **浜田 誠太郎**（早大院） 司会：**伊藤 愉**（明治大）
「スタニスラフスキーの演技論における「体験」とヴィジュアル・イメージ」

［博士論文成果報告］

15:25-16:00 **宮内 拓也**（東大） 司会：**秋山 真一**（上智大）
「ロシア語名詞句の統語構造と意味解釈：問題意識・到達点・残された課題について」

16:05-16:40 **畔柳 千明**（日本学術振興会特別研究員 PD） 司会：**澤田 和彦**（埼玉大）
「ロシア帝国の国家事業としての北京宗教使節団（1715-1863）」

16:45-17:20 **福井 祐生**（日本学術振興会特別研究員 PD） 司会：**小俣 智史**（早大）
「ニコライ・フョードロフの思想の生成の諸相：そのキリスト教的基礎を中心に」

17:25-17:55 支部総会

日本ロシア文学会 関東東北支部報　第 41 号

目次

【支部長 巻頭言】

沼野 恭子　「草花の名前とザーウミ」 3

【研究発表会 報告要旨】

[修士論文成果報告]

西角　美咲　「巡礼における価値観の再認識と揺らぎ

——『ルーシの地の修道院長ダニイルの聖者伝および巡礼記』を題材として——」 4

清水　真伍　「ナスターシャ・フィリーポヴナの「美」の二重性

——「世界をひっくり返す美」のダイナミズム——」 5

町田　航大　「『カラマーゾフの兄弟』における「キリストの発見」の意義

——旧約聖書ヨブ記との構造的相関に着目して——」 6

浜田　誠太郎　「スタニスラフスキーの演技論における「体験」とヴィジュアル・イメージ」.....7

[博士論文成果報告]

宮内　拓也　「ロシア語名詞句の統語構造と意味解釈：

問題意識・到達点・残された課題について」 8

畔柳　千明　「ロシア帝国の国家事業としての北京宗教使節団（1715-1863）」.....9

福井　祐生　「ニコライ・フョードロフの思想の生成の諸相：

そのキリスト教的基礎を中心に」 10

【規約・執行部】

日本ロシア文学会 関東東北支部 規約 11

現行執行部 12

【支部長　巻頭言】

草花の名前とザーウミ

沼野 恭子（東京外国語大学）

わが家の庭の駐車スペース脇に、「猫のひたい」というにはあまりに細長い帯状の土壌がある。そこが殺風景なので、植物を植えることにした。退院してから 1 階のリビングルームで寝起きしている家人が窓越しに草花を眺めたら、少しは心が晴れるかもしれないと、ある時ふと思いついたのである。昨年の秋、専門家に相談して 10 種類以上の宿根草やハーブを植えてもらった。手間ひまのかかる「ガーデニング」はできそうにないけれど、一度植えたら何年も枯れずに育つという多年性の宿根草ならカラーリーフが楽しめそうだ、と思った。すべてを手配してくれた環境計画事務所の Y さんが、少ししてからわざわざ手製のネームプレートを立てに来てくださり、少しおおげさに聞こえるかもしれないが、そのときから世界は一変した。

クリスマスローズがクリスマスでもないのに白や黄緑の慎ましやかな花を咲かせ、ツルニチニチソウが小ぶりの青い花を次々につける。これまで花を見ても「綺麗な花が咲いている」くらいのきわめて大雑把な認識しかなかった私は、アジュガというエキゾティックな名前の草が紫色の可愛らしい花をびっしりつけたことに驚き、ヒューケラという愉快な名前の植物が、背の高い径をにょっきり立ちあげて濃いピンクの小さな星のような花を咲かせているのにいたく感動した。ひとつひとつがこんなにも個性豊かで、めいめいの命を全うしようとしているなんて！

アガパンサス、ギボウシ、アナベルも蕾を膨らませている。アナベル――とっさにナボコフを連想してしまうが、アジサイの一種で、白い手毬のような花（正確にはガクが発達した装飾花）を咲かせるという。

宿根草の名前は、それぞれ由来があるのだろうし、日本語で「意味」を持つものもあるけれど、多くはザーウミのように聞こえる（ついでながら、薬の名前がこれまたザーウミだ。オルメサルタン、フェブキソスタット、プロピベリン、アムロジピン、カルベジロール……）。名前といえば、植物学者の牧野富太郎が「雑草という名の草はない」と言ったと伝えられているが、不思議なことに、植物たちが名前を得たとたんにうちの小さな庭は活気を帯び、踊りだしたのである。そして今や私自身も草に変身して、みんなと一緒に雨が降るのを楽しみにするようになった。

これまで草花たちの呼吸を感じることも生態を知ることもなかったなんて、まったく潤いも情趣もない生活をしてきたものだ、と思う。結局、聞きなれない、ザーウミのような名の植物たちに癒され、その生命力に励まされているのは、家人よりむしろ、ウクライナ侵攻以来長引いているロシアによる戦争に半ば魂を持っていかれ疲弊している私のほうなのだろう。

（了）

【研究発表会 報告要旨】（修士論文成果報告部門）

巡礼における価値観の再認識と揺らぎ
――『ルーシの地の修道院長ダニイルの聖者伝および巡礼記』を題材として――

西角　美咲（早大院）

本発表の目的は、『ルーシの地の修道院長ダニイルの聖者伝および巡礼記』（以下『ダニイルの巡礼記』とする）という史料を用いて巡礼者ダニイルの巡礼「過程」を分析し、ダニイルの価値観やその揺らぎを、同時代的文脈を踏まえて解釈することである。『ダニイルの巡礼記』とは、12 世紀初頭のルーシ人（おそらくチェルニーゴフの修道院長）ダニイルによるエルサレム巡礼の記録である。ルーシ初の詳細な旅の記録であり、後続の同系統の記録群の原型となっている。

『ダニイルの巡礼記』を用いた先行研究群の観点は、2 つに分けられる。1 つ目は、当時のルーシ人の巡礼に対する立場である。巡礼が外交を兼ねることもあったため、主に為政者は巡礼促進の立場を、巡礼が信仰の妨げになるという考えから、主に聖職者は巡礼抑制の立場をとった。ダニイルの巡礼についても、外交目的を推測する研究者がいる。しかし同時に、ダニイルは後者の立場の考え方を共有していた。2 つ目は、当時のルーシ人の反カトリック感情である。反カトリック感情を露わにした当時のルーシの文献はいくつか残っているが、そうした思想がどれほどルーシの間で広まっていたのかについて、疑問を呈す研究者も存在する。『ダニイルの巡礼記』については、反カトリック的な記述は確かに見られるものの、その内容は比較的穏健であると評価されている。

本発表ではダニイルの巡礼「過程」への注目という、先行研究群とは異なったアプローチを用いる。それにより、ダニイルの持つ社会的背景および旅という行為の特徴が、彼の価値観にどのような作用を与えているのかを説明する。

『ダニイルの巡礼記』には、ダニイルが経験的にサラセン人（イスラム教徒）へ危険性を感じ、ルーシの人々や正教徒を同胞とみなして彼らを想起し、正教の正統性を述べ、カトリック教徒にネガティブな目線を向ける様子が記録されていた。こうしたダニイルの様子は、同時代の価値観の反映である。しかし一方で、ダニイルがカトリック教徒やサラセン人からも助けを得ながら巡礼を行っており、彼らを蔑視したり突き放したりするような態度を取っていないことも記録から読み取れる。旅の中で、ダニイルの価値観は時と場合によって揺らいだのである。

記録内の反カトリック的な記述は、ダニイルの帰属意識の発露である。ダニイルは日常と異なる環境に身を置くことによって、ルーシ人正教徒という自らのアイデンティティを再確認した。一方で、カトリックに対し友好的な姿勢を見せる記述は、ダニイルの「境界性（＝ある一つの基準に明確に拠り立っていない状態）」によるものである。ダニイルは同時代の反カトリック姿勢を共有しつつ、そこに完全には拠り立っていない。この状態が、ダニイルの巡礼においてカトリック教徒と正教徒による「コミュニタス（＝連帯）」を生んだのである。

【研究発表会 報告要旨】（修士論文成果報告部門）

ナスターシャ・フィリーポヴナの「美」の二重性
――「世界をひっくり返す美」のダイナミズム――

清水　真伍（東大院）

本発表では、2022 年度に提出した同名の修士論文に基づいて、ドストエフスキーの小説『白痴』のヒロイン、ナスターシャ・フィリーポヴナの「美」の再評価を試みる。

ドストエフスキーの「美」は『カラマーゾフの兄弟』のドミートリイの台詞に基づき、「聖母の美」と「ソドムの美」の二項対立で解釈されることが多い。H.B.カシーナはこの二項対立を「精神的な美（духовная красота）」と「身体的な美（физическая красота）」の対立構造として解釈している。この二項対立において『白痴』のヒロイン、ナスターシャ・フィリーポヴナの「美」は、近年の研究においても、男性を誘惑し堕落させる「身体的な美」として解釈される傾向がある。

ナスターシャ・フィリーポヴナの「美」の身体的側面は、トーツキイやエパンチン将軍の「情欲（страсть）」を掻き立てる「美」としてテキストに現れてくる。

ナスターシャ・フィリーポヴナの「美」に「情欲」を掻き立てる側面がある一方で、ムィシュキン公爵は彼女の内面的な「苦しみ」に目を向け、それゆえに彼女を「美しい」と言い、憐みの感情、すなわち「共苦（сострадание）」を喚起される。

このようにナスターシャ・フィリーポヴナの「美」には「情欲」を掻き立てる身体的側面と「共苦」を喚起する精神的側面の二面性がある。「情欲」と「共苦」の対立については作品の中でムィシュキン公爵自身が指摘しており、とりわけ「共苦」は人間を教化し明るい方向へ導くものとして期待されている。

ナスターシャ・フィリーポヴナの「美」についてエパンチン家の次女アデライーダは「このような美があれば世界をひっくり返すことが出来るわ」と声を上げる。この台詞は従来、世界を破滅させるという意味で解釈されることもあったが、ナスターシャ・フィリーポヴナの「美」の二面性をふまえれば、世界を暗い方向へも明るい方向へも転換し得る彼女の「美」のダイナミズムを表現した台詞と解釈することが出来る。

ナスターシャ・フィリーポヴナの「美」のダイナミズムは「善（добро）」と「悪（зло）」の間での揺らぎに顕著に表れる。西洋美学は伝統的に「美」と「善」の概念を同一視する傾向が強いが、『白痴』にはそのような前提は存在しない。ムィシュキン公爵は「美」の象徴であるナスターシャ・フィリーポヴナが「善良（добрая）」であることを願うが、作品中彼女の言動には常に「悪（зло）」の派生語が付き纏う。その一方、добрая と形容されることは一度もないものの、ナスターシャ・フィリーポヴナは добрая になる可能性を常に見せ続ける。

このようにナスターシャ・フィリーポヴナの「美」を二面性の観点から解釈することにより、彼女の複雑さは「美」のダイナミズムとして説明することが可能になる。

【研究発表会 報告要旨】（修士論文成果報告部門）

『カラマーゾフの兄弟』における「キリストの発見」の意義
――旧約聖書ヨブ記との構造的相関に着目して――

町田　航大（早大院）

本発表では 2022 年度に提出した同名の修士論文の概要を報告する。

無神論が浸透し、キリストの神性が否定される風潮のあった 19 世紀ロシアで、ドストエフスキーはキリストとは何かという問いに向き合い、キリストの受肉がいま・ここにおいて有する意義を捉えようとした。こうしたキリスト論的側面に着目してこの作家の創作を論じる研究は近年盛んであり、その際、新約聖書の影響の解明が特に重視されている。

これに対し、本論は旧約聖書ヨブ記の影響という観点から、『カラマーゾフの兄弟』における作者のキリスト探求の方法の分析を行った。ヨブ記はこの作家の愛読書であったほか、「キリスト以前の人間」による神探求の記録でもあり、キリストの存在を改めて探求するという作者の創作上の課題に適していた。ヨブ記では、旧約の応報の教義によって自分の苦痛が合理化されることに反発したヨブが、神に直接訴えた後、神の顕現を目にして回心する。修論では、ヨブのこうした心理が「キリスト以後」を生きる『カラマーゾフの兄弟』の主要人物によっていかに反復されているかに着目し、作中でのヨブ記との相関を明らかにした。

まず前提として、「神が人となったのは、人が神になるためであった」という正教的な神化思想にもとづく「人類の神的変容」の歴史哲学が、ドストエフスキーも含めた 19 世紀ロシアの宗教思想家の土台であったことを確認した。この「変容」の理想はイワン（大審問官）によって、人間にはできない神の理不尽な要求であると否定される。ここに、時代の「ドグマ」を現実に即して拒絶するヨブとの相関の端緒が見出される。「変容」の道を開いたキリストの意義の否定は、ゾシマの「腐臭」の場面でアリョーシャに引き継がれ、「ガリラヤのカナ」の幻視の中で解消される。この幻視は、「キリストは神化の義務を課して人間を圧迫したのではなく、受肉した時からすでに人間を救い続けている」という現在完了的な救済の実感をもたらし、教条的枠組みを脱した、キリストと個人の生きたつながりを示す。これが、新約以後の文脈における、ヨブに対する神顕現の再現に当たる。

ただし、ヨブ記では冒頭にのみ登場したサタンが、作中ではイワンの悪魔となって、強い存在感を放って終盤に現れる。悪魔はヨブとアリョーシャ両方の誘惑者であり、二人の回心はいずれも他者の無意味な犠牲によって成り立つ喜劇にすぎないと指摘し、アリョーシャの回心の意義を相対化する。キリストをめぐる問いはここでその完結を妨げられ、循環する。

このように、ドストエフスキーはヨブ記の再現と変形によって、キリストをめぐる近代人の心理を「否定と回心の循環」のプロセスとして描いた。このヨブ記的構造は、作中の「信仰」と「不信」を一つの動態として包括している。これは、この作家の宗教性を「信仰と不信」の二項対立で理解しがちな従来の研究の偏りを見直す可能性を示しているのである。

【研究発表会 報告要旨】（修士論文成果報告部門）

スタニスラフスキーの演技論における「体験」とヴィジュアル・イメージ

浜田　誠太郎（早大院）

本研究の目的は、コンスタンチン・スタニスラフスキー（1863-1938）の『俳優の自分に対する仕事』第一部「体験の創造プロセスにおける自分に対する仕事」（1938, 以下『俳優の仕事』第一部）で描かれている演出家（教師）の実践を記述することである。本発表ではその第四章において、俳優（生徒）が「体験 переживание」という特殊な行為／状態に至るために必要な「想像力 воображение」の使い方をいかにして指導しているか、またそのなかでヴィジュアル・イメージがどのように用いられているかを明らかにする。

スタニスラフスキーの『俳優の仕事』は、架空の演劇学校の生徒の日記として、稽古場の様子をレッスンの段階に合わせおおよそ時系列順に描いている。これはスタニスラフスキーが俳優・演出家として長きにわたって書き溜めてきた稽古の実例に基づいて構成されたものであり、ゆえに彼がこれまでどのような手つきで演技指導を行ってきたかが記録された資料と捉えられる。また、スタニスラフスキー自身も『俳優の仕事』第一部の序文において、難解な言葉で俳優を委縮させるのではなくそこで語られていることを読者に「感じて」もらい、印刷された言葉が「読者自身の感情によって生気を蘇らせる」ように書いたと述べている。そのため本研究では教師の言葉を抜き出してその「理論」を検討するのではなく、描かれている出来事を、スタニスラフスキーが教育現場で試みていた実践の痕跡として取り扱う。

『俳優の仕事』第一部第四章は七つの節で構成された比較的短い章だが、第一部全体の大きなテーマである「体験」への手立てとして非常に重要な章である。章の冒頭一節目では、教師の体調不良により彼の自宅で授業が行われることになるが、そこで教師はいくつかの絵画を生徒たちに見せ、それをこれから指導する「想像力」の導入として用いている。その絵画は『俳優の仕事』の中で図版として示されるわけではなく、「想像力」についてイメージするための例として持ち出されている。続く節では、これまでの章で紹介された独自の道具立て（「もしも」や「与えられた状況」）を用いながら、正しい「想像力」を具体的に使うレッスンが始まる。実際には目の前に存在しないものを「心の目で見る」というような練習が行われるが、そこでは映画のスクリーンとフィルムがメタファーとして大きく使われている。

このようなことから、『俳優の仕事』第一部第四章はヴィジュアル・イメージが指導のレトリックとして大きく機能している。その使われ方を検討することは『俳優の仕事』における「体験」を理解するための大きな手掛かりになるだろう。

【研究発表会 報告要旨】（博士論文成果報告部門）

ロシア語名詞句の統語構造と意味解釈：問題意識・到達点・残された課題について

宮内　拓也（東大）

本報告では，報告者が東京外国語大学に提出した博士論文「ロシア語における名詞句の統語構造と意味解釈の研究：顕在的な冠詞がない言語における名詞句の統語構造の問題によせて」の概要を，議論を進めるための技術的側面を可能な限り排除した上で，特に問題意識，到達できたこと，残された問題点の 3 点に焦点を当て述べる．

博士論文の問題意識は冠詞が顕在化しない言語における名詞句の統語構造がいかなるものであるのかということが未解決である点にある．ロシア語のような冠詞を持たない言語において，名詞句が名詞 N を主要部とする Noun Phrase (NP)であるか，限定詞 D を主要部とする Determiner Phrase (DP)であるかは現在でも議論が分かれており，DP が言語横断的に存在するか否かという点は理論言語学における争点の一つとなっている．

そこで，博士論文では形式的な統語論，意味論の理論的枠組みを用いて，顕在的な冠詞を持たない言語としてロシア語を取り上げ，その名詞句の統語構造，および意味解釈を検討し，ロシア語の名詞句は DP 投射を持たないことを示した．これは DP が必ずしも言語普遍的ではないことを意味する．より具体的には，例えば(1)のような英語，ロシア語間の束縛現象に関する文法性の差異や(2)のような出来事名詞の項としての二重生格の制限は，いくつかの前提のもと，ロシア語の名詞句に DP 投射が存在しないと考えることで正確な予測ができることを示した．さらに，しばしばロシア語における DP の存在の根拠とされる現象として挙げられる(3)のような定語における語順の制限や(4)のような語順による最大解釈の可否は意味論的に導出することが可能で，必ずしも統語的に DP を想定する証左とはならないことを示した．

(1) a. Kustrica$_i$’s latest film really disappointed him$_i$.
　　b. *Колин$_i$ последний фильм сильно его$_i$ разочаровал.
　　「{クストリッツァ$_i$の / コーリャ$_i$の} 最新の映画は本当に彼$_i$をがっかりさせた.」
(2) *разрушение города врага 「敵が町を破壊すること」
(3) { этот Колин / *Колин этот } последний фильм 「このコーリャの最新の映画」
(4) { пять Диминых / Димины пять } книг 「ジーマの(最大の) 5 冊の本」

以上のような現象を主要な根拠として，博士論文ではロシア語の名詞句は DP を持たない NP であることを示したが，博士論文における見解と矛盾し得る問題，ないしは未解決の問題として，(5)のように所有形容詞，所有代名詞が句を形成しているように見られる現象や(6)のように出来事名詞の項の語順により量化詞の作用域が可変し得る現象といったものが挙げられる．もちろんこれら以外にも検討すべきことはまだ多くあり，今後は記述的にも理論的にもより多角的に研究を進めていく必要がある．

(5) a. моя с мамой комната 「私と母の部屋」
　　b. тётин Кашин муж 「カーシャおばさんの夫」
(6) a. открывание каким-то гостем каждой двери (✓∃＞∀, ✓∀＞∃)
　　b. открывание какой-то двери каждым гостем (✓∃＞∀, *∀＞∃)
　　「{あらゆるドアをある客が / あらゆる客があるドアを} 開けること」

【研究発表会 報告要旨】（博士論文成果報告部門）

ロシア帝国の国家事業としての北京宗教使節団（1715–1863）

畔柳千明（日本学術振興会特別研究員 PD）

私は、2022 年提出の博士論文「ロシア帝国の国家事業としての北京宗教使節団（1715–1863）」で、北京宗教使節団 Русская духовная миссия в Пекине の役割と 18–19 世紀におけるその変化を検討した。使節団は、ロシア正教会の聖職者を長として 1715–1898 年に 18 度北京を往来したが、ロシア以外西洋諸国に類例がないため、「露中関係の特殊性」といった、ロシアのアイデンティティの構築に関与したと思われる。本発表では博士論文成果報告として、使節団の派遣を支えた枠組みを概観する。

一般に国家は、近世キリスト教の海外宣教の有力な推進主体であった。植民地支配を行う国家の保護下に置かれ「帝国の尖兵」と呼ばれた宣教師であるが、実際には植民地化に非協力的な者も多かったことはよく知られている。19 世紀ロシア帝国では、伝道は政治外交的目的に沿って行われる一方で、当局の監視・制限対象でもあった。ロシア帝国の教会外交の研究者イリーナ・スミルノヴァは中国伝道を巡る当局と宣教師の見解の相違を指摘している。ただしスミルノヴァの研究対象はロシア帝国の対西洋諸国外交との関係のみ、時期は 19 世紀中葉のみである。私は博士論文で使節団をロシア帝国の国家事業と位置づけ、露清の二国間交渉におけるその役割を、より包括的に理解することを試みた。

北京宗教使節団は制度として明らかに不完全であったが、その背景は先行研究でも十分に説明されていない。宗教的には、現地の伝道対象の集団との関係は常に不安定で、外交的には（ロシア外交に有益な知見をもたらした事例は個別には確認できるが）特にアヘン戦争以降、対清外交が重要性を増す一方で北京宗教使節団の重要性は失われていった。1861 年、ロシアは外交ルートとしての北京宗教使節団の放棄に至った。

これについて私は、第一に、北京宗教使節団はそもそも国家において企図されたわけではなかったのではないかという仮説を提示した。北京宗教使節団派遣の国家機構への統合は、18 世紀前半以降に徐々に進行した。その際のロシア国家による派遣目的は、当初はカトリックへの対抗にあったが、それはその後、西洋諸国への対抗へと変化したことが史料の分析から伺える。

第二に、国家事業としての北京宗教使節団派遣枠組みは、むしろロシア国家の権力が及ばない人々が前提となっていることを指摘した。具体的には①東シベリアの商人、②在華イエズス会士である。これら東西交渉史的な存在を前提としたからこそ、ロシア政府は使節団という非効率な制度を維持し続けた。19 世紀中葉の使節団の変容は、これらの集団がグローバルな影響力を失ったことを意味しており、従ってスミルノヴァが研究したようなロシア外交の範疇にとどまらず、より幅広い文化の変容の反映として検討可能であろう。

【研究発表会 報告要旨】（博士論文成果報告部門）

ニコライ・フョードロフの思想の生成の諸相：そのキリスト教的基礎を中心に

福井祐生（日本学術振興会特別研究員、早稲田大学文学学術院）

本発表の目的は、発表者が 2022 年度に提出した博士論文「ニコライ・フョードロフの『共同事業』のプロジェクトとその正教的文脈」の内容を紹介した上で、発表者自身が現在の時点からこれを批判的に評価し、今後の研究の方向性を提示することにある。

ニコライ・フョードロヴィチ・フョードロフ（1829-1903）は、ドストエフスキー、トルストイ、ソロヴィヨフを始めとする、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのロシア文学・芸術・思想に影響を及ぼした「共同事業」のプロジェクトを形成した思想家である。

発表者は博士論文において、幾多の科学的実践から構成される社会統合及び宇宙統合のプロジェクトが「聖堂外聖体礼儀」として提示されていることに注目した。そして、これまでのフョードロフの研究史の中では専ら平行的に提示されてきた、キリスト教思想家としての受容と科学的事業の計画者としての受容とを架橋することを試みた。第一部では、共同事業のプロジェクトにおける受肉と復活の問題、教会共同体と悪の問題を通じて、フョードロフの聖堂外聖体礼儀のアイデアを説明した。第二部では、ベルジャーエフらによる自然主義的性格の批判との関連で、プロジェクトの社会統合的諸側面を考察した。言語・民族・宗教的統合、地域共同体の形成、平和樹立などを題材とするフョードロフの諸テキストを分析した結果、彼が「親縁性（родство）」や専制などの自然的・地上的諸原理をプロジェクトの中に取り込むことで、それらの変容過程を描こうとしていることが明らかになった。第三部では、コスミズムの創始者としてのフョードロフ受容との関連で、プロジェクトの宇宙統合的諸側面を考察した。テイヤール・ド・シャルダンの思想と比較分析した結果、フョードロフのプロジェクトにおける人間は、自己の身体の再形成を通じて自然との交わりを回復し、細分化した自然を自らと共に神において再統合する、宇宙的司祭として描かれていることが分かった。このように共同事業は、自然主義的なプロジェクトとして展開されながらも、実際には聖体礼儀の形式とその諸性格を保持する超越・内在的なわざであった。

従来の研究には、フョードロフの思想の独自性を仮定した上で、後世の文学・芸術・思想の中に影響の痕跡を見出すことにより、その重要性を確認するものが多かった。こうした方法はそもそも、類似する思想が 20 世紀初頭に多く存在したという事実を軽視している。それに対して発表者の研究は、これまでにはあまり研究の及んでいない、フョードロフの思想の生成の諸相に光を当てたものとなった。フョードロフの思想の独自性をその生成過程から問い直すことで、ロシア文学・芸術・思想史におけるその意義がより明確なものとなるのではないか。

【規約・執行部】

日本ロシア文学会関東東北支部規約

1988 年 10 月 5 日制定・支部登録
2017 年 6 月最終修正
2022 年 6 月改訂・10 月発効

第 1 条　本支部は日本ロシア文学会関東東北支部と称する。

第 2 条　本支部は日本ロシア文学会の会則に基づいて，その目的達成のために独自に次のような事業を行う。
(1)共同の研究ならびに調査。(2)研究発表会・講演会の開催。
(3)機関誌の発行。(4)その他本支部の目的を達成するために必要な事業。

第 3 条　本支部は原則として，関東甲信越および東北地方に居住するか所属先を持つ日本ロシア文学会会員をもって組織する。

第 4 条　本支部について次の機関をおく。
(1)総会　(2)運営委員会

第 5 条　総会は本支部の最高議決機関であり，毎年 1 回開催するものとする。ただし必要に応じて臨時総会を開くことができる。 総会の議決は出席会員の過半数によって成立する。

第 6 条　運営委員会は支部長と運営委員をもって構成し，支部の運営にあたる。

第 7 条　本支部に次の役員をおく。
(1)支部長　(2)運営委員　(3)事務局長　(4)監事

第 8 条　支部長は支部選出の理事の互選により選出する。

第 9 条　支部長は本支部を代表し，支部の運営を統轄する。

第 10 条　運営委員は，別に定める選出規定により選出する。

第 11 条　運営委員は，運営委員会を構成し，支部の運営を分担する。

第 12 条　事務局長は，「支部規約に関わる規定 4)」に則って選出され，会計・事務を担当する。

第 13 条　監事は，別に定める選出規定により選出する。

第 14 条　監事は，年度末に会計監査を行い，総会でその報告を行う。

第 15 条　役員の任期は 2 年とし，重任を妨げない。

第 16 条　本支部の経費は会費，補助金その他の収入をもってこれにあてる。

第 17 条　会費に関する規定は別に定める。

第 18 条　本支部は，事務局をおき，本支部の会計および事務全般を委ねる。事務局設置の規定は別に定める。

第 19 条　運営委員会は毎年決算報告を作成し，総会の承認を求めなければならない。

第 20 条　本支部の会計年度は 4 月 1 日に始まり，翌年 3 月 31 日をもって終わる。

第 21 条　本規約の改正および諸規定，内規の制定・改正は総会の議決による。

支部規約に関わる規定

1） 第 10 条に関わる運営委員選出規定

原則として 2 名以上の所属会員を専任教員として擁する，関東甲信越および東北地方にある大学から 1 名の委員を選出したのち，支部長とそれら委員が上記大学所属会員以外から若干名選出する。

2） 第 13 条に関わる監事選出規定

監事は，支部会員から 2 名を支部長が指名するものとする。

3） 第 17 条に関わる会費規定

年額 1000 円とする。会費の改訂は支部総会の承認を要するものとする。

4） 第 18 条に関わる事務局設置規定

支部事務局は事務局長の下に設置される。事務局長は、運営委員会で協議の上，関東甲信越および東北地方にある大学のうち，原則として 2 名以上の所属会員を専任教員として擁する大学から候補を選出し， 2 年の任期で任命する。

5） 第 8 条に関わる理事候補選出規定

支部選出の理事候補については、支部総会で承認を受けた選挙管理委員会が選挙を実施する。支部選出分 15 名のうち、11 名は選挙結果に基づいて選び、4 名は支部長が運営委員会の承認を得た上で指名するものとする。ただし、選挙結果によって選ばれる 11 名分については、三期連続の選出（過去の支部長指名枠での選出を含め）を認めない。なお、この規定は 2023 年度の理事選挙から適用される。

現行執行部

支部長： 沼野恭子

運営委員： 秋山真一、朝妻恵里子、大森雅子、加藤百合、川辺博、寒河江光徳、佐藤千登勢、鈴木正美、野中進、乗松亨平、長谷川章、前田和泉、八木君人

事務局長： 大森雅子

監事： 朝妻恵里子、八木君人

日本ロシア文学会 関東東北支部
研究発表会・総会

2023年 6月3日（土）13：00-17：55

13:00　開会：支部長挨拶

[修士論文成果報告部門]

13:05–13:35　西角 美咲（早大院）　司会：伊東 一郎
「巡礼における価値観の再認識と揺らぎ
――『ルーシの地の修道院長ダニイルの聖者伝および巡礼記』を題材として――」

13:40–14:10　清水 真伍（東大院）　司会：番場 俊
「ナスターシャ・フィリーポヴナの「美」の二重性――「世界をひっくり返す美」のダイナミズム――」

14:15–14:45　町田 航大（早大院）　司会：安岡 治子
「『カラマーゾフの兄弟』における「キリストの発見」の意義
――旧約聖書ヨブ記との構造的相関に着目して――」

14:50–15:20　浜田 誠太郎（早大院）　司会：伊藤 愉
「スタニスラフスキーの演技論における「体験」とヴィジュアル・イメージ」

[博士論文成果報告部門]

15:25–16:00　宮内 拓也（東大）　司会：秋山 真一
「ロシア語名詞句の統語構造と意味解釈：問題意識・到達点・残された課題について」

16:05–16:40　畔柳 千明（日本学術振興会特別研究員PD）　司会：澤田 和彦
「ロシア帝国の国家事業としての北京宗教使節団（1715–1863）」

16:45–17:20　福井 祐生（日本学術振興会特別研究員PD）　司会：小俣 智史
「ニコライ・フョードロフの思想の生成の諸相：そのキリスト教的基礎を中心に」

17:25–17:55　支部総会

Zoomによるオンライン研究発表会です。申込フォーム：
https://zoom.us/meeting/register/tJEpdeGpqDMjHd1rdxvebPRtFyysf_qiiMYO

日本ロシア文学会 関東東北支部事務局　千葉大学 人文科学研究院　大森雅子研究室　kanto.yaar@gmail.com